山田寺跡（さんでんじ）

編集　各務原市埋蔵文化財調査センター
発行　各務原市教育委員会
TEL (058) 383-1123
平成22年3月

写真１　山田寺跡周辺の空中写真と伽藍推定域

１．発掘調査の契機

山田寺は、7世紀の終わり頃に建立（こんりゅう）された古代寺院です。市内では、最も古いお寺の一つになります。現在、その姿は跡形もなく、全て土の中に埋没して遺跡となっています。遺跡から南方へ 200mの場所には、臨済（りんざい）宗の「象耕山（しょうこうざん）山田寺」が今もありますが、古代の山田寺と直接の関係はありません。

山田寺跡が所在するのは、蘇原寺島町（そはらてらじま）です。寺島という地名が物語る通り、島のように小高い地形に寺が築かれていたようです。この蘇原という地域には、山田寺跡を含めて寺院遺跡が５箇所に確認されており、古代史研究者から大変に注目されています。山田寺は、その中で最も大きく、そして長く続いたお寺として重要な位置を占めます。お寺の最後の年代は、９世紀の後半と考えられますので、およそ 200 年間も続いたことになります。

山田寺が無くなってから長い歳月を経た幕末の頃、この土地が開墾されることになりました。その時に、お寺を構成していた建物の一つである塔の土台（基壇（きだん））跡が崩され、中心柱を据（す）えた石（塔心礎（とうしんそ））と、その中に埋納された合金製の鋺（わん）（舎利（しゃり）容器）が発見されました。これらは大切に保管され、今は国の重要文化財に指定されています。その後、周辺の土中からは多量の古代瓦や須恵器（すえき）が出土しました。なかには、金堂屋根の両端に葺（ふ）かれていた鴟尾（しび）瓦も確認されています。こちらは、市指定の重要文化財となっています。

このような発見がもとで、この土地に立派な古代寺院が存在していたことが知れ渡りました。ところが、遺跡の詳しい内容については発掘調査を行う機会がなかなか得られず不明のままでした。近年、周辺には住宅建築などが進んでおり、このままでは山田寺跡という重要な遺跡の内容が分からないままになってしまうかもしれません。そこで、遺跡の内容や範囲を確認しておこうという目的で、国と県の協力のもとに範囲確認調査を実施する運びとなりました。

2．周辺の地勢と遺跡

山田寺跡など、５個所の古代寺院が所在した場所は、各務原台地の北端部になります。この辺りは、湧水によって台地が刻まれ半島状の地形が形成されています。お寺は、そうした地形上の目立つ場所に造られていたようです。

南東には、５世紀の末から熊田山北古墳群などが造営されます。この頃、当地に力をもった豪族が現れ、一帯が開拓されたようです。

北方には境川が流れ、その流域は古代からの穀倉地帯です。また、川の交通や、古東山道の陸上交通などが発達し、この地は重要な場所であったと考えられます。

そして、７世紀の終わり頃になると、この勢力は政治とも結びつき、古代寺院を連立させる程に強大化しました。

図１　周辺の地形と古墳･遺跡の分布

0　1000m　S=1/20000

● 現存する円墳
○ 現在確認できない円墳
現在確認できない前方後円墳
□ 古代寺院遺跡・中世館址
水田利用に見る低湿地
--- 台地地形を表す等高線の一部

3．発掘調査の成果

発掘調査は、土地を所有者からお借りし、１m幅のトレンチ（発掘面積を限定する枠）を東西南北に展開しながら進めました。そして、必要に応じてトレンチを拡張しました。

・平成 17 年度　第１次調査　山田寺跡推定域の北部を中心とした調査です。土地改良や過去の建築物の影響で土中は大きく削られていましたが、運よく伽藍の北辺を示すと思われる北大溝（幅 3.0m、深さ 1.02m）と、その内側に小溝（幅1.3m、深さ72cm）を検出しました。そして、その間に幅4mの回廊を推定しました。大溝の中からは多量の瓦と須恵器が出土し、それらが示す年代幅によって山田寺の運営年代が７世紀の終わりから９世紀の後半までであることが分かりました。

・平成 18 年度　第２次調査　伽藍推定部の中心部と西部の調査です。地主の方々のご協力により、住宅の間を出来る限り調査させて頂きました。その結果、伽藍の西辺を示すと思われる西大溝（幅 1.9m、深さ 1.2m）と、金堂付近に位置したと考えられる中央大溝（幅 2.1m、深さ 1.1m）、そして塔の基壇の一部を検出しました。溝中から、金銅製の風招が瓦に挟まって出土したことにより、その側近で屋根が倒壊したのではないかと思われます。

・平成 19 年度　第３次調査　伽藍推定部の東側の調査です。中心部より外へ少し離れた位置に、当時の廃棄土坑（直径６m以上）を検出しました。内部には寺の中で使用していた須恵器や葺き替えた瓦等が埋もれていました。このような廃棄土坑が構えられる場所は、当然、寺の外の目立たない位置で、それほど遠くない距離にあったことを物語ります。

・平成 21 年度　第４次調査　伽藍推定部の南側の調査です。住宅敷地の庭の中を調査させて頂きました。その結果、伽藍の南辺を示す南大溝（幅 3.4m、深さ 40cm）、もう一つ南側に走る外廓溝（幅 2.8m、深さ 72cm）を検出しました。

4．発掘調査の様子

発掘調査の雰囲気、瓦や須恵器、大溝の検出状況が伝わる写真をセレクトして紹介します。発掘作業は、様々な天候の下に力仕事や根気の要る作業が求められますが、ロマンや発見も少なくありません。

写真２　多量の瓦の検出作業（第一次調査　北大溝）
溝の中には、非常に多くの瓦や須恵器が埋まっています。それらに傷を付けないよう、竹箆（へら）や刷毛（はけ）を使って作業します。

写真３　軒丸瓦などの出土状況（第一次調査　北大溝）
各種類の瓦が混ざって出土します。どのような組み合わせで埋没しているかが、お寺の建物を調べるための重要なデータとなります。

写真４　北大溝の底に落ちた瓦（第一次調査　北大溝）
伽藍を区画する溝は深く、その底から大型の瓦破片が出土している様子です。お寺の建物が崩れた後、すぐに瓦が溝の中に落ち込んだようです。

写真５　遺構の検出作業（第一次調査　北大溝）
地面に掘られた凹凸を、正確に検出して掘り下げます。奥で作業をしている場所では、北大溝が途切れることが分かりました。

写真６　多量の瓦の検出作業（第三次調査　廃棄土坑）
当時、お寺で要らなくなったり壊れてしまった須恵器や瓦を、何度も掘り返して処分していたようです。

写真７　瓦の出土状況（第三次調査　廃棄土坑）
須恵器や瓦の埋まり方が分かるように掘り下げた様子です。貴重な仏具が多く含まれており、まさにタイムカプセルのような状態でした。

1a1 型式

1a2 型式

1b 型式

2 型式

3 型式

単弁型式

細弁型式

写真８　出土した軒丸瓦の各型式

５．主な出土品

発掘調査では、多量の遺物が出土しました。大半は、屋根に葺かれていた瓦です。なかでも、重要視したいものは軒丸瓦（写真８）です。この瓦は、軒平瓦（写真９）と共に軒の最前列に重ねられます。表面には、仏教にちなんだ蓮（はす）の花が表してあります。これは、彫刻した木笵（もくはん）に粘土塊（かい）を押すことによって形作ります。木笵は、傷（いた）んでくると掘り直しますので少しずつ型が変化します。例えば１型式は、1a1→1a2→1bの新旧関係となります。中央の連子（れんじ）（種子を表現した粒）の形や外周のデザインが変わっていることに注目してください。

軒丸瓦は、今回の調査で７型式が確認されましたが、このことは、複数の堂塔が存在したことを意味しています。蘇原の他の寺院遺跡では認められない種数ですので、山田寺が最大であったとする根拠となります。

その他、須恵器製の仏具が少量出土しました。お坊さんが托鉢（たくはつ）を行う時に使うような仏鉢（ぶっぱち）、お線香を立てるための火舎（かしゃ）、明かりを灯すための灯明具（とうみょうぐ）は、お寺ならではの道具です。

← 正面側に三重の凸線が表わされています。

写真９　三重弧文軒平瓦

写真 10　須恵器 仏鉢

図３　須恵器 獣脚付火舎（復元図）

写真 12　獣脚に刻まれた獣面

写真 11　灯明具に使用した須恵器 無台坏

菜種（なたね）油を紐に染み込ませて、器の口元で火を灯します。黒く付着しているものは、油が焦げたものです。

図４　山田寺跡の伽藍推定復元

写真13　塔心礎

幅1.5m、高さ90cmの硬質砂岩製です。本来は、塔基壇の中心部に位置したものですが、現在の無染寺境内へ移動されています。そこでは、いつも見学することができます。

上面の丸く窪んだ部分に、塔の中心柱が置かれました。その真ん中に小さな穴が開いていますが、そこに舎利容器が埋納されていました（写真13）。

写真14　舎利容器（佐波理碗）

佐波理とは、錫・鉛・銀の合金です。容器の中には舎利（仏の遺骨）などが納められたと言われますが不明です。塔心礎とともに国指定の重要文化財です。

６．山田寺の伽藍範囲

４次に渡る発掘調査によって、山田寺伽藍の範囲を推定するデータが得られました。伽藍とは、お寺の中心部、すなわち塔や金堂を配置し回廊で区画した部分です。山田寺の場合、その伽藍の外周に沿って大溝が掘られていたようです。通常、古代のお寺には、このような大溝はありません。

この溝は、伽藍外周を全て取り巻いていたのではなく、途中で途切れた部分が確認されました。何らかの理由で溝を掘る必要があって、その位置と向きを回廊に沿わせたために、このような結果になったのかもしれません。大溝と回廊は、真北から時計回り方向に 2.5° 振れていますが、当時の設計角度として意味があったのだと思われます。南側に、もう一本の外廊（がいかく）溝が検出されましたが、この溝の角度は真の東西に一致しています。おそらく、後に追加されたもので、当初の設計に合わせていないのかもしれません。大溝は、東側のみ未確認です。図４の通り推定するとすれば、伽藍の規模は南北 69m、東西 77mの規模ということになります。

伽藍内の堂塔は、瓦葺きの非常に重量のある建築物なので、柱の土台には大型の石を据え、基礎全体は土を何層にも叩き締めて基壇（きだん）を造りました。発掘調査で確認されたのは、塔の基壇のみでしたので、それ以外の建物数と位置については推測の域を出ません。

7．堂塔の様子を表わす遺物

伽藍の中に建ち並んでいた堂塔は木造建築物であったため、柱などの部材は腐食してしまい残っていません。では、瓦や礎石の他に、当時の建物の様子について知ることはできるのでしょうか。

朱引きのある軒平瓦

写真 15 は、軒平瓦の裏側（凸面）に朱が付着している例です。図５の通り、瓦を受ける木材（木請）に沿って朱を塗ったとき、瓦が接する付近にも朱が付いてしまったと理解されます。この偶然によって、堂塔の柱が朱色に塗られていたことが分かります。また、朱引きの位置は、瓦が軒先に突き出していた部分の、長さを示しています。

この様に遺物を観察することで、実際に残っていない物であっても、その状態を知ることができます。

写真 15　朱引き線の付いた軒平瓦

図５　軒先の瓦葺きの様子

金銅製風招

写真 17 は、風招と呼ばれるものです。幅 16 cm、厚さは 1mm という大変薄いものです。銅を含んだ合金で出来ており、表裏面には金メッキが施されています。出土した時には錆で覆われていましたが、保存処理を施して本来の輝きを取り戻しました。

図６のように、堂塔の軒角の下には風鐸がぶら下がります。風鐸の中には舌という芯があり、その下に風招が吊られます。風が吹くと、風招が仰ぎ舌が風鐸の内側に当たって荘厳な音色を奏でます。

多くの瓦に挟まるようにして埋もれていました。

写真 16　風招が発見された時の様子（第二次調査）

写真 17　保存処理によって金の輝きを取り戻した風招

図６　風招の設置例（上下の向きは両方の場合あり）